

禅語録を読むための基本語彙（続）

古 賀 英 彦

凡 例

一、語の配列は字の音の五十音順による。原則として漢音を用い、呉音・唐音など慣用にしたがう場合には指示する。

例、声↓しょう

二、引証に用いた文例の出拠について段落を指示したものは、左のテキストによる。

宛陵録 入矢義高『伝心法要・宛陵録』

伝心法要 同前

頓悟要門 岩波文庫本

臨濟録 岩波文庫本

（敦煌本）六祖壇經 Philip B. Yampolsky: the platform sutra of the sixth patriarch 所収

本稿の出来た因縁について、「初稿」の緒言を参照していただきたい。

清書しつつ、気がかりなことが一つあったので付記しておきたい。「祝」の字に、従来の禅語辞典類はみな「シユク」という音を当てている。しかし『康熙字典』の示すところによると音は「ソク」である。したがって本稿ではその項に挙げておいた。

あ

Y角 Y字型のつ。幼児のゆう髪型。〔趙州録上〕僧問、如何是清淨伽藍。師云、——女子

阿家 しゅうとめ。〔阿姑〕ともいう。〔玄沙語録中〕恰似新婦児怕——相似。

阿師 阿は軽く親密さの意味合いを添える接頭語。僧を指す。

ほんさん。〔臨濟録示衆十四〕設解得百本経論、不如一箇無事底——。〔伝灯録十四葉山章〕師云、多ロー——(おしやべり坊主)。

阿嬢 おつ母さん。〔阿娘〕とも書く。〔祖堂集三悲忠章〕

阿爹 お父つあ。〔碧巖録十二頌評唱〕只是阿爹与——相似。

阿婆 おんな。母のことをいう場合もある。〔祖堂集十六黄檗希運章〕——曰、吾是五障之身、故非法器。

阿爺 お父つあ。〔阿爺〕とも書く。〔伝灯録十五徳山宣鑑章〕曰、如何是不病者、師曰、——、——。

阿勞 苦勞、骨おり。阿は接頭語。〔碧岩録四本則評唱〕是他心機、那裏有如許多——。

阿郎 主人、旦那さま。〔郎主〕〔郎君〕ともいう。〔祖堂集八曹山本寂章〕若是下人出来、著衣更勝——、奈何縁被人識得伊。

阿爺 お父つあ。〔祖堂集五雲岳曇晟章〕師問尼衆曰、汝——還在也無。

局 クソをする。〔趙州録下〕尽十方世界是沙門一隻眼、你等諸人向什麼処——。

挨拶 グサリとやること。〔碧巖録二十三本則評唱〕他三人同得同証、同見同聞、同拈同用、一出入、遞相——。

挨拶 押し詰める、突きつめる。〔挨拶〕は「推」とも書く。〔碧巖録二十本則評唱〕被箇柄子——、失却一隻眼。

悪発 腹を立てる、怒る。〔祖堂集十二禾山無殷章〕又時見僧云、還知禾山——摩。僧便問、和尚無端——作什麼。

安下 腰をおろす。〔祖堂集十長生皎然章〕師到鵝湖、當門——。

安置 置く、据えつける、落着かせる、寝に就く。また「お寝みなさい」という挨拶の言葉。〔伝灯録七塩官齊安章〕師云、今日夜也、且婦本位——、明日却来。

安排 割りふる、配置する。〔臨濟録行録十四〕第三位——這上座。

安名 名前をつける。〔臨濟録示衆十〕酌度世界底人、与三界——。

行李 行腹と同じ。日常の修行のありかた。〔祖堂集八曹山本寂章〕如何是沙門——処。云、頭上戴角、身著毛衣。

衣被 仏教語で衣服のことをいう。〔碧巖録六頌評唱〕八面清風惹——。

委 知る、明らめる。〔委知〕〔委悉〕ともいう。〔祖堂集十

「睡竜道薄章」問、如何是仏。師云、觀面相呈由不識、問仏之人焉能！。

委曲 手問どらせる。「伝法宝紀」祖範師資、発大方便、令心直至、無所——。

委悉 知る。明らめる。「委知」ともいう。「碧巖録八垂示」還——麼。

委得 知る。「委知」ともいう。「祖堂集四百丈懷海章」師——这个消息、便下来出、迎接帰山。

嘆 人を叱ったり注意を促すときに発する大声。また笑うさま。「碧巖録十二頌」因思長慶陸大夫、解道合笑不合哭。——。

為得 教化する、接化する。——「為人」(「伝灯録十八玄沙章」自救尚不得、争解——他人。

為頭 真先に、卒先して。「洞山録」徳山——作主。

為人 「人の為にす」と訓じる。もともと四悉檀の中の各各為人悉檀(仏が法を説くに衆生の機に応じて導くこと)に発し、

禅匠が修行者のため種々に手だてを弄することをいう。教化、接化。「趙州録上」問、和尚還——也無。師云、——。学云、如何——。

意度 あれこれと心に思い描く。「臨濟録示衆一」求善知識——。

一応 一切、すべて。元来名詞を修飾する語。「応」「応是」「応有」に同じ。「祖堂集十一沩潭匡悟章」与摩則——如是去也。

一火 ひとかたまりの集団。多く盗賊のたぐいを指す。宋以後

では「一伙」と書くことが多い。「碧巖録三十六本則著語」——弄泥団漢。

一擲 げんこつ一発。平手打ちは「一掌」。「雲門広録下」師見僧来、乃举起拳、作打勢。僧近前、作受勢。師与——。無对。

一期 ひとたび、その場合々に。「二時間」ともいう。「雲門広録上」——聞人説著、便生疑心、問仏問法、問向上、門向下。

一下 一回、一度、一発。「一場」と同じ意味に用いることもある。「龐居士語録」比来折你——。

一向 ひとすべ、ひたむきに。「伝灯録十八竜冊道怱章」只為抛家日久、流浪年深、——縁塵、致見如此。

一交 一番、一丁。「雲門広録下」師乃擅拳云、我共你相撲——得麼。

一切 否定を強める副詞に用いられることがある。「梵網經下」若仏子、——不得受別請利養入己。「南泉語要」大道——実無凡聖。

一拶 グサリとひと突きすること。「碧巖録一本則評唱」達磨劈頭与他——、多少漏逗了也。

一時 いっときに。一斉に。「祖堂集三慧忠章」問、如何得成仏去。師曰、仏与衆生——放却、当処解脱。「同」座主——向前来。

一掌 平手打ち一ぱつ。ゲンコツ一ぱつは「一擲」。「臨濟録勘弁十九」有定上座到参問、如何是仏法大意。師下繩床、擒住与——、便托開。

一火 ひとかたまりの集団。多く盗賊のたぐいを指す。宋以後

「上」「下」「一場」と同じ。〔碧巖録四本則評唱〕「若不是滄山、也被他折挫——」。

「場」ひとしきり、一幕。また「下」「上」に同じ。〔雲門広録上〕「贏得——口滑、去道転遠。〔碧巖録二十八本則評唱〕看這老漢——慊懣（恥ずかしい一幕）。

「星」微小なものについて言う。復数の場合は星星。〔頓悟要門下三十〕「又見性人、猶如積草等須弥山、只用——之火、業障如草、智慧似火。」

「遣」一めぐり。〔大慧書答魯侍郎第二書〕「縛却手脚、遠四天下、挖——也不能得悟。」

「隊」ひとかたまりの集団。多く軽侮の対象となる人々を指す。〔伝灯録二十四清凉文益章〕「因雲門問僧、什麼処来。云、江西来。雲門云、江西——老宿寐語住也未。僧無对。」

「一段」ひとつの。また、此の事。「一件」ともいう。〔洞山録〕「問——事、還得否。〔圖悟心要下示從大師〕列祖出興、只持箇——。」

「著」一手。もとは碁の用語。〔雲門広録上〕「問、如何是七經八横。師云、放汝——。」

「直」まっしぐらに。〔祖堂集六投子大同章〕「趙州便下来——走。」

「転」「下」「上」に同じ。〔伝灯録十八竜冊道欽章〕「雪峯曰、更問我——、豈不好。曰、就和尚請——問頭。」

「頓」一回、の意。また「一頓棒」の略。〔臨濟録勘弁一〕「何不道、来日更喫——。」

「一味」ひたすら、いっしょに。〔禪林僧宝伝四玄沙師備章〕「号為——平実、分証法身之量。」

「絡索」一くさり、一段落。〔大慧書答李参政〕「即今遮——、切忌作寓言指物会。」

「引頸」首をのべる。〔伝灯録十五徳山宣鑑章〕「竜牙問、学人伏鎖、擬取師頭時如何。師——。」

「引手」手を伸べて物を取る。〔睦州語録〕「睦州陳操尚書、因齋次、尚書行餅餡与僧。僧遂——接。」

「印破」印可証明の刻印を押す。お墨付きをくれてやる。〔臨濟録示衆五〕「道流、莫取次被諸方老師——面門、道我解禪解道。」

「因縁」機縁。悟入への契機。仏語の「因縁」の転訛。〔碧巖録十「一本則評唱」〕「恐——不在這裏。」

「隱隱」見えないけれどもはつきりしているという様子を表わす語。〔臨濟録勘弁二十五〕「祇聞空中鈴響——而去。」

う

「有日」いつかは必ずその日が来る。〔臨濟録示衆一〕「如是之流、尽須抵債、向閻老前、吞熱鉄丸——。」

「有省」ハッと気がつく。〔碧巖録五本則評唱〕「因此——。有分、真理を悟ることのできる本分を具えている、という意。」

「有理」ちゃんとしている、如法だ。〔祖堂集十一保福從展章〕「龍居士語録」人々尽——、為什麼道不得。」

「直是——、無靈処。」

「胡乱（うろん）みだりに、でたらめに。胡は、むやみ、やたら、

の意。〔碧巖録一本則著語〕——指注。

云道 この二字で「いう」の意。〔言道〕ともいう（臨濟録）。

〔寒山詩〕余問神仙術、——若為比。

え

回換 くるくると引き廻す。〔臨濟録示衆四〕你且隨處作主、

立処皆真。境界——不得。

回互 かみ合うこと。相互嵌入。〔廻互〕とも書く。〔伝灯録三十

参同契〕門門一切境、——不——、廻而更相涉、不爾依位住、

会得 理解してすっかり自分のものにする。↓「体得」「体会」

〔碧巖録十七本則評唱〕香林道、坐久成勞。還會麼。若——、

百草頭上罷卻干戈。

縁氣 もと、素因。〔玄沙語録上〕是生死根本、妄想——。

お

応時 すぐに。〔登時〕ともいう。〔祖堂集十五塩官齊安章〕禅

師——来。

応用 現実における対応のしかた、一切の行動。〔臨濟録示

衆八〕你如今——処、欠少什麼。

〔往〕往 しょっちゅう、しばしば。〔碧巖録三本則評唱〕若不知

落処、——枯木巖前差路去在。

屋裏 自分の家。おのれ自身。自分の専門分野。〔裏〕は「裡」

とも書く。〔臨濟録示衆十〕你一念心癡、是无色界、是你——

一家具子。

か

下下 ひとつひとつ。〔臨濟録示衆十〕——作主、不受境惑。

下擱 拳骨をくらわす。〔祖堂集十二竜廻從盛章〕今日便是這

个上座——。

下語 コメントをつける。「あぎょ」と読む習わし。〔伝灯録二

十永安善静章〕限汝十日内、——得中、即從汝去。

下手 手をつける。〔雲門広録上〕和尚作麼生——拈掇。

下場頭 とどのつまり、落ちぶれ果てて。〔睦州語録〕比来抛

鉤釣鯨鯢、——却釣得箇蝦蟇出来。

下地 おりる。↓「く地」〔雲門広録上〕師便——、以拄杖一

時打、趁下去。

下落 落ち着くところ、行き先、決着。〔碧巖録三十八本則評

唱〕他凡是問答垂示、不妨語句尖新、撥花旗錦、字字皆有——。

可可 多少、いくらか。また、かなり、相当に、の意の俗語。

〔伝灯録二十八南泉普願語〕既不知、即今認得——是耶。

可可地 かなり、相当に。〔臨濟録示衆十〕寔情大難、仏法

幽玄、解得——。

可憐生 可愛い、いとおいしい。形容詞にも副詞にも用いる。

〔可憐生〕とも書く。↓「生」〔祖堂集十七西院大安章〕只是

看一頭水牯牛、——受人言語、如今一時變作个露地白牛。

呵呵 笑い声の擬音。〔伝灯録三十獲珠吟〕歌復歌、盤陀石上

笑——。

何怜 なかなか、見事に。〔祖堂集六洞山良介章〕 適来——念得、因什摩道未会。

果子 くだもの。「菓子」とも書く。日本語の「かし」は転訛したもの。〔伝灯録十二陳尊宿章〕 有僧新到参、方礼拜、師叱云、闍黎因何偷常住——喫。

果是 果たして、案の定。〔碧巖録十九本則評唱〕——次日天竜和尚到庵。

果然 果たして、案の定。しかし必ずしも予期した通りという意のみに用いられるとは限らず、意外な事態や結果の出現にも、驚きの語気を伴って用いられることがある。その点では「居然」とも同義。〔祖堂集十長慶慧稜章〕——不見。

家具 造作、備品。「家具子」ともいう。〔祖堂集十六南泉普願章〕 打破——、殺却火、長伸瞌睡。

家常 托鉢のときの呼び声。家常飯、つまり平生の食べ物を乞う意。蒋礼鴻『敦煌變文字義通釈』に詳しい考証がある。〔祖堂集十六黄蘗希運章〕 後遊上都、因行分衛而造一門云、——。

家風 個性、独自の風格。〔趙州録上〕 問、如何是和尚——。師云、屏風雖破、骨格猶存。

過与 人にもものを手渡しすること。〔伝灯録六百丈懷海章〕 滯山把一枝、吹三两氣、——師。

禍事 一大事だ、大変だ。〔臨濟録上堂五〕 僧問、如何是劒刃上事。師云、——。

窠窟 収まりかえった境地。自己完結した世界。〔祖堂集六洞

山良价章〕 問、正与摩時如何。師曰、是闍梨——。

快 さつさと。文語の「速」と同じ。〔祖堂集十一雲門文偃章〕 師云、大衆立久、一礼三拜。

快与 早くしろ、さつさとやれ。「与」は意味のない語助。

「好与」「早与」「速与」など同じ用法。〔陸州語録〕 上堂云、汝等——、——、老僧七十七也、看看脱去也。

乖張 唐・宋の時の俗語。宋の陳叔方の『穎川語小』巻下によると、俗間で日の吉凶を定める方法に「五角六張」というのがあり、「五が角に遇い、六が張に遇う」ような日には、すべて事がうまくいかず、乖(ぎくしゃく)することが多いので、「乖角」とか「乖張」とかいいうのだそうである。わが国の「さんりんぼう」に似た俗信である(入矢義高『龍居士語録』十六頁)。〔伝灯録二十八羅漢桂琛語〕 生死事大、此一団子消殺不到、在処——不少。

怪 あやしむ意と、とがめる、怒る意とがある。「恠」とも書く。〔趙州録上〕 問、此事如何弁。師云、我——你。

怪笑 あざ笑うこと。「恠笑」とも書く。〔碧巖録十六本則〕 遭人——。

外頭 そと。↓「頭」。古くは「外許」という。〔祖堂集二達摩章〕 心中雖吉、——凶。

崖 「捱」と同じ。「挨」と書くこともある。ぐいぐいと押しまくる、追いつめてゆく。〔大慧書答曾侍郎第一書〕 但如此——将去、時時於静勝中、切不可忘了須弥山放下著兩則語。

画一画 さつと線を引いたり円を描いたりすること。〔臨濟録

勘弁十」師以杖面前——。

較

元来ある基準に到達しているか否かを表わす語であるが、

禪録ではほとんどの場合「少し足りない」「もう一息のこ

ろだ」の意に用いる。例えば「猶較些子」は「まだもう一息

だ」という意で、許容の一手前の段階で抑えた言い方。従

って文脈によっては「もう一息のところまで来ている」「ま

あまあのところだ」という緩やかな許容になる場合もある。

「較」は「校」「交」とも書く。「伝灯録八南泉普願章」雖然

如是、猶一王老師一線道（糸ひとすじの差がある）。「趙州録

下」也不一多。（それほど大したちがいでない。）

学人 坐禅学道の修行者。またその自称。「伝灯録九福州大安

章」師即造於百丈、礼而問曰、——欲求識仏、何是即是。百

丈日、大似騎牛覓牛。

活計 くらしむき、なりわい。「南泉語要」上堂云、諸子、老

僧十八上、解作——。

喝 大声でどなること。「カーツ」と発声することではない。

「伝灯録六百丈懷海章」一日師謂衆曰、仏法不是小事。老僧

昔再參馬祖、被大師——、直得三日耳聾眼暗。

葛藤 文字言説、またそれをもてあそぶこと。「臨濟録上堂二」

為你信不及、所以今日——。

欠少 欠く、持つべきものを持たない。「少」も無の意。「伝心

法要十五」何処——一毫毛。

乾屎橛 従来「クソ掻き籠」と解されたのは誤りで、棒状のま

ま乾燥したクソそのものをいう。「臨濟録上堂三」無位真人

是什麼——（無位の真人とはなんとも見事な枯れクソだ）。

「雲門広録上」覓什麼——咬（なんの——を覚えて咬ら

んとするや）。

勘破 本質を見抜く、しらべあげる。必ずしも相手のインチキ

を見破るという意味ではない。「伝灯録十趙州從諗章」待我

去——這婆子。

棺木 かんおけ。「祖堂集六漸源仲興章」師因隨道吾往檀越家

相看、乃以手敲——問、生也、死也。吾云、生亦不道、死亦

不道。

管取 保証する、うけあうという原義から転じて、まちがいな

く、たしかにという意の副詞にも用いる。「碧岩録二十四本

則評唱」如今人問著、——分疎不下。「同二十五頌評唱」——

一員無事道人。

管帶 「管」とは心に確保すること。「帶」は身に着けて離さな

いようにすること。「祖堂集七石頭全豁章」雖是後生、亦能

——。「碧巖録七本則評唱」他尋常——參究。

関摂子 戸の開閉に便するために取りつけた「とまら」と、そ

れを受ける敷居の「とぼそ」。この二つを総称している。文

語では極。位置・視点をカラリと一転させる心機の喩え。

「祖堂集十三竜潭如新章」問、古人道、横説堅説、猶未知有

向上——。如何是向上——。師云、頼遇娘生臂短。

「碧巖録一頌評唱」雪竇恐怕人逐情見、所以撥転——。

還我——来「還す」とは、元来は借りているものを人に返却す

ることである。従って「……を私に返せ」という言い方は、

「お前に預けてあるそれを返却せよ」という口吻なのであり、その提示をいやおうなしに相手に義務づけた言い方である(入矢義高『龐居士語録』四二頁)。「祖堂集二弘忍章」——本来明上座面目。「陸州語録」来、——徑截一路。「願道 願う。「道」を見よ。「祖堂集四葉山惟微章」——什摩。

き

氣息 息苦しき、苛立ち、苛々。「玄沙語録中仏慧泉頌」雖然通得咽喉、未免一場——。

氣息 息使い。意気込み。「臨濟録示衆十四」不作丈夫——。記取 ちゃんと記憶する、忘れないでおく。↓「取」(祖堂集十一保福從展章)師云、大衆分明——、向後舉似作家、第一機對。「趙州錄上」泉云、——来、喚水牯牛浴。

鬼窟 幽鬼の巢窟。死者の霊の棲みか。「坐禪儀」法雲円通禪師、亦阿人閉目坐禪、以謂黑山——。

愧 かたじけない、ありがたい、という意の俗語。「慚愧」ともいう。「祖堂集七岳頭全豁章」且伊向這裏湊泊。

機縁 人と人との出会い。互いの条件、情況が交わり合う局面。「臨濟録行狀」——語句、載于行録。

欺 あなどる、みくびる。「あざむく」ではない。「欺負」ともいう。「祖堂集七雪峯義存章」和尚何得重重相——。

欺謾 「欺」も「謾」も「あなどる」「見くびる」「コケにする」の意。「だます」意ではない。「伝灯録十九雲門文偃章」且汝諸人有什麼不足処。大丈夫漢、阿誰無分。不可受人——、取

人処分。

疑著 何かがあるのではないか、または、どこかおかしいぞと疑う。↓「著」(臨濟録勘弁十一)我從來——這漢。「碧巖錄四本則評唱」某甲自今後、更不——天下老和尚舌頭。喫交 けつまづいてはったり倒れる。すってんころりん。「喫交」ともいう。「碧巖錄三十八本則評唱」大似平地——。

喫茶去 茶を飲んでこい、お茶を飲みに行け。「趙州錄下」師問二新到、上座曾到此問否。云、不曾到。師云、——。

却回 古来「きやうい」とよみならわす。かえる、もどる、の意。「臨濟録行録九」師行數里、疑此事、——終夏。

休歇 休息する、くつろぐ。けりをつける。「臨濟録示衆十」你取山僧口裏語、不如——無事去。

去就 ものけじめの判断、世法についての常識。「雲門広録中」者般底作与麼——。把棒一時趁散。

去処 ①場所。去く処または去った処という意ではなく、単に「ところ」の意の俗語。あとの大慧書の例は、それを理念化したもの。「敦煌本六祖壇經三十八」須知——年月日姓名、遍相付嘱。無壇經裏承、非南宗弟子也。②立脚地(自分を据える場所)。「大慧書答江給事」自家理會本命元辰、教——分明、便是世間出世間一箇了事底大丈夫也。

居常 つねひごろ、平常。「碧巖錄二十三本則評唱」在雪峯會裏、——問答。

舉——

虚頭 見せかけ、無内容。「実頭」の対。↓「頭」「略(掠)

虚頭「〔祖堂集七巖頭全語章〕什麼処学得——来。

境塊子 境とは、本質ではなくて可視的な現象にすぎぬもの。

それを「かたまり」と称するのは、つまらぬものという含み。

〔臨濟録示衆十〕如善知識把出箇——、向学人面前弄、前

人弄得、下下作主、不受境惑。

境惑 本心を見失わせるような外的現象。客塵。用例は前項を

見よ。

競頭 競って、われ勝ちに。↓「頭」。「争頭」ともいう。〔祖

堂集十六古靈神讚章〕師於窓下看經次、蠅子——打其窓、求

覓出路。

擒住 ひつかまえる。〔臨濟録勘弁十九〕師下繩床、——与

一掌、便托開。

く

工天「功夫」とも書く。①修行者が目的の成就のために払う

さまざまな努力。〔大慧書答呂舍人書〕所謂——者、思量世

間塵勞底心、回在乾屎橛上、令情識不行、如土木偶人相似。

②時間、ひま。〔碧巖錄三十四頌評唱〕我豈有——為俗人拭

涕耶。

苦屈 なんともやり切れない、情けない極み。〔伝灯録十九雲

門文偈章〕——、図他一粒米、失却半年糧。

苦口 口が酸っぱくなるまで。〔雪峯語録下遺誠〕吾僅四十年

来、未嘗不——相勸。

苦哉 困った、やり切れん。〔臨濟録示衆十〕——、瞎禿子無

眼人、把我著底衣、認青黃赤白。

屈 ①相手の身に覚えのないことを強いる。またそのような

目に会うことをもいう。冤屈。〔趙州録下〕不可喚大王作中

等下等人也。恐——大王。②曲げてお越しねがう。屈請する。

〔祖堂集三二宿覺章〕——老宿、婦房裏喫茶。

屈著 罪のないものを罪におとしいる、いわれもなく人をお

としめる。屈は枉屈・冤屈の意。〔伝灯録十六南際僧一章〕

僧問、幸獲親近、乞師指示。曰、我若指示、即——汝。

け

形段 かたち、形態。〔臨濟録示衆一〕是你目前歷歷底、勿一

箇——孤明、是這箇解說法聽法。

計較（校） あれこれ思いめぐらす。〔祖堂集十九香嚴智閑章〕

無——、忘覺知。〔碧巖錄十七本則評唱〕無你——、作道理處。

經求 何かを得ようと画策する。〔伝灯録十四丹霞天然章〕你

更擬趁逐什麼物。不用——落空去。

輕欺 あなどる、みくびる。〔玄沙語録中〕久住来白師云、新

到——和尚。

見解 考えかた、見かた、理解。〔伝心法要下七〕似者箇——、

有什麼用處。

見似 見せる。〔話似〕「拳似」「呈似」「説似」などと同じ言い

方。〔祖堂集十九香嚴智閑章〕馮山向仰山説前件因縁、兼把

偈子、——仰山。

見処 自分でつかんだもの。これだと納得したもの。〔臨濟録

示衆十四「山僧往日未有——時、黑漫漫地。

軒知「軒」は「懸」との同音通用。「懸察」「懸悟」「懸料」な

どの例のように、時や所の距てを超えて、それと解ること。

「碧巖録六十三本則評唱」此事——如此分明。

團續 人をからめ取るしかけ。からくり。「椿續」「絳續」「團

貴」とも書く。「碧巖録五本則評唱」透得他——、方見他用處。

揅拈「揅」も「拈」も「えらぶ」という意。これだとえらび

取ること。「信心銘」至道無難、唯嫌——。

権且 かりに、一時しのぎに。「臨濟録示衆十」恐人生斷見、

——立虛名。

言道 言う。↓「道」「臨濟録示衆九」你諸方——、有修有

証。

眼花 ものがちらついて見える眼の病氣。「趙州録上」問、如

何是毗盧円相。師云、老僧自小出家、不曾——。

こ

己事 自己の一大事、現に人身を受けていることの根本義。

「雲門広録中」——若明、始消他供養。

古鏡 本来具わっている知慧(本智)の喩え。「趙州録下」問、

——不磨、還照也無。師云、前生是因、今生是果。

古仏 釈迦牟尼仏より以前の仏、あるいは釈迦牟尼仏に肩をな

らべる仏。最高の讃辞。「趙州録上」雪峯問師此語、讚云、

——、——。

孤負 せっかくのころざしをあだにする、無にする。また、

人の期待を裏切る。「辜負」とも書く。「伝灯録十四翠微無

学章」得即得、——他諸仏。

箇人 ちゃんとした人間、出来た人。「雲門広録上」者裏也須

是——始得。

互換 たがい位置をとりかえる。「碧巖録七十五頌評唱」看

他両箇、機鋒——。

語話 ものを言う、しゃべる。また、言辭、言葉。「伝灯録十

五洞山良价章」体得仏向上事、方有些子——分。

公案 官庁の裁決案件。ひいて古則公案。「現成公案」とは、

現にそのままが(判決を前にした)案件だ、ということ、

相手の出かたを、犯人の出頭と見立てて、その過誤を自覚さ

せようとする方便。「伝灯録十九雲門文偃章」睦州和尚機見

僧入門来、便云、現成——、放汝三十棒。「碧巖録一頌評唱」

且據雪竇頌此——、一似善舞太阿劍相似。

功勳 悟りを開くことによって得られると期待される価値。

「祖堂集十二禾山無殷章」上上者一撥便去、中下者落在——。

向去 この先、これから先、このかた。「祖堂集五德山宣鑑章」

從今——、終不疑天下老師舌頭。

向下 ①した、したに。↓「向」「向上」「雲門広録上」問仏

問法、問向上、問——、求覓解會。②そのあと。「敦煌本六

祖壇經四十二」此是法華經一乘法。——分三、為迷人故。

向外 そのと。「臨濟録示衆十」向裏——、逢著便殺。

向後 のち、これからさき。↓「他後」「祖堂集十九陳蒲鞋章」

——不得辜負老僧。珍重。

向上 うえ、うえに。↓「向下」〔伝心法要三〕縱使三祇精進

修行、歷諸地一念証時、祇証元来自仏、——更不添得一物。

向前 さきごろ、以前。〔祖堂集六石霜慶諸章〕我——在一老

宿处、有个師僧同過夏。

向道 言ってやる。〔伝灯録二十八南泉普願語〕所以数々——、

仏不会道、我自修行。

向南 みなみ。〔雲門広録上〕生緣若在——、南有雪峰臥竜。

向北 きた。〔伝灯録二十二双泉師寛章〕向南有竹、——有木。

向裏 うち、なか。〔臨濟示衆録十〕——向外、逢著便殺。

好去 別れに際して、去って行く人に向つて、あとに残る人が

言う挨拶の言葉。お大事に、さようなら。↓「好住」〔雪峯

語録下〕——早婦。

好手 腕きき、やりて、名人。〔龐居士語録〕拈一放一、未為

——。

好住 別れて行く者が見送る人に言う挨拶の言葉。お元気で、

お達者で。〔龐居士語録〕但願空諸所有、慎勿更諸所無、

——世間、皆如影響。

好与 しつかりやりなさい、立派にやりなさい、の意。また別

れに際して言う場合には、さよなら、ご機嫌ようという意味

合いも含まれる。「与」は意味のない副詞語尾。「早与」

「速与」「快与」参照。〔祖堂集六洞山良价章〕你未在、——。

〔同二弘忍章〕道明云、行者——、速向嶺南。

好来 さあ来た、さあおいで。うながす語気。〔龐居士語録〕

——、——。

叫叫 牛の鳴き声。また怒りの声。〔睦州語録〕師拈弘子、便

打云、——、這裏嚇我来。

後頭 あと、後方。「前頭」に対する語。「頭」は接尾語。

〔祖堂集十長慶慧稜章〕前頭彼此作家、——却不作家。

搥搥 俗語で、ごみ、がらくた。明・清では土へんの字に書く

こともあり、また上の字を「塚」に、下の字を「圾」に書く

こともある。字音はともに同じ。〔雲門広録上〕若是一般掠

虚漢、食人涎唾、記得一堆一擔——、到处馳騁驢驘馬蹏。

搆 ①出会う、到達する。「遶」「覲」とも書く。〔碧巖録六

十五頌著語〕前不——村、後不迭店。②びたりと見て取る、ツ

ボをつかむ。〔碧巖録二十二本則評唱〕到這裏、如擊石火、

似閃電光、方可——得。

合頭 過不足なくびたりと合致する、びたりとツボをおさえる。

極則。〔宗鏡録六〕勸君学道莫貪求、万事無心道——。〔祖堂

集六洞山良价章〕守著——、則出身無路。

諸訛 ひねた発想・表現であるため、時には詭弁とも見まがう

ほど難解なこと。ことさらにむつかしげなひねりを加えた言

い廻し。「整訛」とも書く。〔碧巖録六十二本則著語〕雲門大

師是即是、不妨——、猶較些子。若子細檢点将来、未免屎臭

気。

起体 そのものすばりに、ものそのものとして。〔禪源諸詮集

都序上〕全據者、如上所説、但——真指靈知即是心性、余皆

虚妄。

黑豆 文字の喩え。特に經典の文字（ことば）についていう。

〔伝灯録十四三平義忠章〕有人問、——未生芽時如何。師曰、
仏亦不知。

極則 自他ともに異論のない定式。動かぬ定理。〔祖堂集十五

盤山宝積章〕若言非心非仏、猶是指蹤之一。

骨董 がらくた。〔禅林僧宝伝二十一慈明楚円章〕嘗寮——箱、
以竹杖荷之。

今時 俗諦(世諦)をいう。〔趙州録中〕問、尽却——、如何
是。的。的。師云、尽却——、莫問那箇。

今朝 「今日」と同じ。また「今」の意。〔趙州録中〕問、百骸
俱潰散、一物鎮長靈時如何。師云、——又風起。

今日 きょうという意味のほかに、今という意がある。また
「開悟の時節」をいう。〔碧州録中〕——早晚也。〔碧巖録十
一本則〕黄檗示衆云、汝諸人尽是酒糟漢、恁麼行脚、何処
有——。

さ

差 ①すれちがう、ずれる。「蹉」と通用することも多い。

〔祖堂集五竜潭崇信章〕見即直下便見、擬思則便——。②病が
よくなることをいう。「瘥」とも書く。「差可」ともいう。

〔悟性論〕若作此会者、一切諸相、不離自解、一切諸病、不
治自——、此皆大禪定力。③人を使いに立てて、事を処理する
をいう。〔祖堂集五石室善導章〕主事——兩人往洞山、達哀書。

嘆 シャッノという声。またその声を発すること。多く判断
停止を迫る場合に用いる。〔祖堂集六投子大同章〕問、便請

和尚直指。師——。僧曰、即這個、別更有也無。師曰、莫閑言
語。

坐断 「坐」は恐らく「挫」の転訛であろう。唐代には「挫断」

と書いた例が散見するが、宋以後は「坐断」に統一される。

完全否定する意。〔臨濟録示衆二〕取山僧見処、——報化仏
頭。

坐地 単に坐するという意。「地」は意味のない接尾語。地に坐
るのではない。↓「下地」「立地」〔祖堂集四藥山維儼章〕兩

人——歇息次。〔伝灯録二十四清凉文益章〕古人道、我立
地待汝觀去。山僧如今——待汝觀去。

柴 たき木、薪。しばではない。〔龐居士語録〕神通並妙用、
運水与搬——。

在意 気をつける。元以後では「小心在意」という。〔祖堂集
十四黄檗希運章〕諸人亦須——、急急努力。

在裏 居る。「裏」は現代語の「裡」に当り、意味のない接

尾語。〔祖堂集六投子大同章〕和尚來時、莫向他説、納僧
——。

罪過 わびる言葉。相済みません、悪うございました、という
意(入矢義高『龐居士語録』一二七頁)。〔伝灯録十六雪峯義

存章〕老僧——。

作家 練達した禅匠、やり手の禅僧。〔趙州録中〕——即不与
麼問。

作者 「作家」に同じ。〔祖堂集十九臨濟義玄章〕——、如猛火
燃。

昨日 近い過去のある日を指す。前日とは限らない。先日、このあいだ。〔龐居士語録〕——相見、何似今日。

昨来 きのう。〔祖堂集四石頭希遷章〕——到和尚処問仏法、忽忽底後生来、東石頭上坐。

拶 グサリ一突き。〔碧巖録三十本則著語〕

挨著 グサリと刺す、切り込む、追求する。〔碧巖録四頌評唱〕

輕輕——、便腰做段、股做截。

割割 ぶしつけなことをする(言う)。敦煌写本「雜抄」では「筍筍」。〔祖堂集十長慶慧稜章〕莫——。

撒手 何かにつかまっていた手をバツとはなすこと。〔無門関三十二則〕懸崖——。

雜貨鋪 よろず屋。「真金鋪」を見よ。

三寸 舌のこと。〔臨濟録行録十九〕任將——輝天地、一句臨機試道看。

慚愧 感歎詞として用いられ、ありがたや、の意。唐代から元代まで一般に用いられた俗語。文語の用法とは異なる。〔慚

または「愧」の一字だけでも「感謝する」意に用いる。〔祖堂集十五東寺如会章〕——、——、老僧不如滄山。

し

子細 細心の注意をはらう、よくよく吟味する。〔臨濟録示衆

十〕參学之人、大須——

死急 火急。〔臨濟録示衆十四〕禿腰生、有甚麼——、披他師子皮、卻作野干鳴。

死馬医 死んだ馬を生きかえらせようと無益な努力をする獣医。

手のほどこしようもないことに立ち向おうとする者。〔雲門広録上〕上堂云、不得已、且作——、向汝道是箇什麼。

指頭 ゆび。↓「頭」〔祖堂集十九俱胝章〕某甲得天童和尚——禪、一生用不尽。

祇待 対処する、もてなす、あしらう。〔投子語録〕問、大衆雲臻、和尚如何——。師撫掌三下。

祇对 答える、応対する。「祇对」「祇对」とも書く。〔伝灯録十趙州從諗章〕師云、雪峯忽若問汝云、和尚有何言

句、汝作麼生——。

厮兒 小せがれ。男の子に対する蔑称。「小厮兒」ともいう。〔祖堂集十七普化章〕臨際——、只具一隻眼。

次早 翌朝。〔洞山録〕百巖——入堂、召二上座。

持論 論客として主張を立てる、筋の通った議論をする。〔臨濟録上堂二〕這箇師僧、卻堪——。

時節 ①時期、時間。②或る決定的な時点。〔臨濟録示衆五〕無仏無衆生、無古無今、得者便得、不歷——。

時中 十二時中の略。一日という生活時間の全体。〔祖堂集十二禾山無殷章〕問、学人——息尽境縁、未審当帰何処。

識取 ちゃんと見てとる、しかと十分に識別する。〔臨濟録示衆六〕你若欲得生死去住脱著自由、即今——聽法底人。

識得 その本質を見て取る、見極める。〔臨濟録示衆八〕但有来者、尽——伊。

叱 叱責の言葉を述べるのではなく、鋭い声を発したり舌打

ちしたりすること。「玄沙広録上」時、有僧問、從上宗旨如何。師默然。僧再問。師乃一之。

漆桶 うるし(普通は黒うるし) おけ。物の道理を見てとれない眼にたとえ、そのような闇い眼の持ち主を罵る言葉として用いる。「雲門広録中」將謂靈利者、——。

日↓にち

実地 大地をいう。着実・堅実な在り方に喩える。宋の邵康節が司馬光の人物を批評して「脚踏実地人」(足が地に着いている人)と言ったのは有名で、そのご朱子学でも禪門でも一種の格言として愛用された。「祖堂集七雪峯義存章」玄沙云、山中和尚、脚根不踏——。

実頭 実直、まじめ、律義。また、実直に、まじめに、律義に。

「如法」という語に近い。「投子語録」師示衆云、人人総道、投子——。「同」問、如何是投子——為人処。

借問 ものをたずねる時に使う敬辞。おたずねいたしますが……。転じて問うことをいう。「祖堂集十三報慈光雲章」或有人——汝、汝且作摩生向他道。

手脚 やり手。腕前、術策。「雲門広録上」汝若不是箇——、機關人拳、便承当得、早落第二機也。「碧巖録十五本則評唱」雲門有這般——。

豎起 まっすぐに立てる。「碧巖録十一本則評唱」祖見我来、便——弘子。

収殺 事をしめくくすること。「大慧書答張舍人」欲脱生死、而只以口頭說靜、便要——、似埋頭向東走、欲取西辺物。

周遮 まわりくどい、くだくだしい。「碧巖録三十一垂示」古人公案、未免——。

集定 集合してそれぞれの位置が定まること。「雲門広録上」上堂、大衆——。

愁殺 ひどく憂えさせる。「碧巖録三頌著語」——人。

出 芸能用語で、芝居の音曲の一ふしをいう。「伝灯録十四

雲巖疊巖章」葉山乃又問、聞汝解弄師子、是否。師曰、是。弄得幾——。師曰、弄得六——。

出身 出離する、解脱する。「祖堂集六洞山良价章」守著合頭、則——無路。「同十鏡清道忞章」——猶可易、脱体道還難。

処分 いいつけ、命令。また動詞としても用いる。「祖堂集十長慶慧稜章」依師——。

少 無い、欠く。「趙州録上」算你只——此一問。

少神 元氣のないこと、臆抜けていること。「趙州録上」問、如何是——底人。師云、老僧不如你。学云、不占勝。師云、你因什麼——。

召 声を掛ける、名を呼ぶ。「伝灯録八汾州無業章」師纔出、

相——云、大德。師迴首。

声色 六境のうちはじめの二を挙げて一切現象を表わす。多くの場合、言句のことをいう。「伝心法要十五」多是学禪道者、皆著一切——。

性燥 カットとなる、むかつ腹立てる。「燥」は「慄」「慄」(躁)とも書く。「伝灯録十九雲門文偃章」不敢望你出来、——把老漢打一擲。

承当 うけがう、引き受ける、己れのこととする。〔伝灯録十五
洞山良价章〕雲巖曰、——這箇事、大須審細。

笑殺 笑いとばす。〔祖堂集十一越山鑒真章〕昔日曾嚮玄沙道、

——張三李四歌。

將知 単に「知る」という意。〔將〕は軽い接頭語。〔將息〕

〔將養〕〔將恐〕の場合も同じ。〔雲門広録上〕——与磨行脚、
臘年得休歇麼。

消 つかう、費す。〔消用〕ともいう。また享受する。〔消

受〕ともいう。〔祖堂集十三招慶道匡章〕一滴水也難。〔雲
門広録中〕己事若明、始——他供養。

商量 相談する、協議する。〔祖庭事苑〕一によれば、商人の

かけひきのように、中をとっておのおのが満足するようにす
ることである、と。〔雲門広録上〕待老漢与汝大家——。

成持 育成する、計らってやる、守り立ててやる。〔成綱〕と

も書く。〔祖堂集十四馬祖道一章〕是你两个僧、便是某甲朋
友。——老人。

状似 俗語。両語で「にる」という意。状が何々に似る、とい
うのではない。〔碧巖録三十八本則〕祖師心印——鉄牛之機。

娘生 「娘」は俗語で母親のこと。母親から生まれたまま、生
まれつき。また、天生の・本来的な、という意の形容詞に用

いることもある。〔臨濟録示衆十〕不是——下便会、還是体
究練磨、一朝自省。

常住 寺院の什物や不動産をいう。〔伝灯録十二陳尊宿章〕有
僧新到参、方礼拜、師叱云、閻黎因何偷——果子喫。

嬢 おつかさん。「娘」とも書く。〔伝灯録十六感潭資国章〕
死却爺、死却——。

心行 不用意に痕跡を残すような心の働きを批判的という場合
に使う。〔心行処滅〕の心行とは意味も用法も異なる。〔碧巖

録三十九本則著語〕將錯就錯、是什麼——。

心頭 ころ。——頭。〔大慧書答曾侍郎第三書〕若如此休
歇、到千仏出世、也休歇不得、転使——迷悶耳。

信手 手あたり次第に。〔碧巖録七垂示〕——拈来、無有不是。

信道 信じる。〔道〕は意味のない接尾語。從來「道を信ず」
と読むのは誤り。〔祖堂集四葉山維儼章〕不——老僧不虛免
言。

侵早 朝はやく。〔趙州録下〕莫言——起、更有夜行人。

真金鋪 純金を売る店。〔祖堂集四葉山維儼章〕石頭是——、

江西是雜貨鋪。

請益 いったん教えを受けたあと、なお不明の点について、ふ
たたび教えを請うことをいう。〔しんえき〕とよみ習わす。

〔臨濟録勘弁二十三〕有僧入室——。
人——にん

す

水牯牛 去勢した水牛。〔趙州録下〕師在南泉時、泉牽一頭——

——、入僧堂内、巡堂而転。

随喜 字義どおりには、法の喜びにあやかること。説法を聴聞
したり、お寺に詣ること（単に見物する場合も含む）をいう

〔入矢義高「龐居士語録」一八四頁〕。〔龐居士語録〕居士嘗遊講肆、——金剛經。

隨分 それなりに。自分の持ち前（本領・技量・権能）の許す範囲内で。〔雪峯語録上〕不妨——好手。

搗住 胸ぐらをとらえる。〔臨濟録〕大愚——云、這屎牀鬼子。

せ

施設 手段、方便、手だて。また、それ等を發動すること。

〔雲門広録上〕問、從上古德、以心伝心、今日諸師將何——。

是事 あらゆる事、一切事。〔雲門広録中〕我已前到時、——不足。如今作麼生。

成↓じょう

声・性↓じょう

省要 そのものずばりのかなめのところ。〔碧巖録十九本則評唱〕只管恣意情解、不会他古人——處。

省力 手間ひまをはぶく、手かずがはぶける。〔伝灯録二十八南泉普願語〕可不——。

石頭石。↓「」頭「」〔祖堂集五雲巖曇晟章〕——還點頭也無。惜取 大事にする、大切にする。↓「」取「」〔祖堂集十二荷玉匡慧章〕——眉毛好。

折合 しめくくりをつける。また、決着。〔祖堂集十鏡清道愆章〕作麼生——。〔碧巖録六十三頌著語〕作什麼——。

接 会う、受け入れる。〔趙州録中〕問、与麼来底人、師還——也無。師云、——。

接嘴 言い返す、口ごたえする。嘴は俗に口のことをいう。相手の言葉が終るや否や口をつぐこと。〔趙州録上〕相罵饒汝——、相唾饒汝潑水。

接得 受け取る、受けいれる、もてなす。〔祖堂集九雲蓋源禪章〕無人——渠。

節角 ごつごつと骨張った。とげだらけの。〔雲門広録中〕——語須是箇人始得。

節級 順次に。また宋代では順序次第という意の名詞にも用いる。〔原人論〕初唯第五性教所説。從後段已去、——方同諸教、各如注説。

説似 言う。↓「」似「」〔伝灯録五南嶽懷讓章〕——一物即不中。

説著 「道著」に同じ。びたりと言いとめる。〔祖堂集十六南泉普願章〕師云、智不到處、作麼生道。吾対云、切忌——。師曰、灼然、——則頭角生也。

説道

言う。〔言道〕ともいう。↓「」道「」〔雲門広録上〕若是箇人聞——什麼處有老宿出世、便好裏面唾、汙我耳目。

説破 説き尽くす。ぶちまけて言う。〔玄沙語録中〕今日不惜眉毛、為諸人——。

説話 ものを言う、しゃべる。また、言辭、言葉。〔碧巖録八本則〕一夏以来、為兄弟——。

舌頭 舌。↓「」頭「」〔臨濟録行録九〕已後坐却天下人——。

薦取 「薦得」にはほ同じ。積極的に我が任とする。〔伝灯録十九雲門文偃章〕百草頭上——老僧、鬧市裏識取天子。

九雲門文偃章

百草頭上——老僧、鬧市裏識取天子。

鬧市裏識取天子

識取天子

天子

天子

天子

天子

薦得 合点する、酌み取る、受け止める。主体的に把握するというニュアンスをもつ。〔碧巖録十四本則評唱〕若当頭——、便可帰家穩坐。

選仏 仏を銓衡する。選拔されて仏となる。〔祖堂集十五禪居士章〕此是——処、心空及第帰。〔碧巖録四本則評唱〕——若無如是眼、仮饒千載又奚爲。

全体 まるごと、ものの本質がまるごと、本質そのままに。

「全体大用」という場合もこの意。〔祖堂集十鼓山神晏章〕古徳云、纔白四羯磨後、——戒定慧。

前程 将来、後日、これから先。〔雲門広録上〕問、初秋夏末、——忽有人問、如何祇对。

前頭 時間・位置について「まえ」。「後頭」に対する。〔祖堂集十長慶慧稜章〕——彼此作家、後頭却不作家。

善為 お大事に、気をつけて。去って行くものに対する挨拶の言葉。〔祖堂集六洞山良价章〕得三五年後辞和尚。和尚云、——。〔伝灯録十芙蓉靈訓章〕時寒、途中——。

そ

早与 早く。↓「与」〔祖堂集十四百丈懷海章〕努力猛作。

——。莫待耳聾眼暗、頭白面皮皺。

走作 意識が対象につられてあたふたと動くこと。「造作」と同義に用いることもある。〔祖堂集五三平義忠章〕今時出来、尽学个馳求——、将当自己眼目。

相应 一体になる。ツーカーで通じ合う。〔碧巖録五本則評唱〕

須是自己胷中流出、蓋天蓋地、方有少分——。

相次 順次に、番がまわって。〔碧巖録六十頌著語〕拏令者先犯、——到你頭上。

草鞋錢 わらじ代。「草」はわらのこと。〔祖堂集十六南泉普願章〕漿水錢則且置、——教阿誰還。

草草 大ざっぱなやり方、いい加減な行動や措置をいう。手荒

らな取り扱いとか混雑の意とするのは誤り。〔龐居士語録〕士乃指空中雪曰、好雪、片片不落別処。有全禪客曰、落在甚処。士遂与一掌。全曰、也不得——。

草料 家畜にやるまぐさ。〔碧巖録十八本則著語〕何不与佗本分——。

湊泊 接近する、どっと集まる。〔祖堂集五竜潭崇信章〕四海道流、無由——。

勦絶 底の底まで抉り取る。抜本的に始末する。〔碧巖録二十頌第二〕這老漢也未得——、復成一頌。

蒼天 嘆息をあらわす感嘆詞。やれ悲しや、おゝ神様よ。〔趙州録中〕問、学人近入叢林、乞師指示。師云、——。

造作 無用な手間をかける。〔祖堂集十二荷玉匡慧章〕問、十二時中、如何与道相应。師云、莫——。

速与 はやくしろ。「早与」とも、「快与」ともいう。〔祖堂集

九落浦元安章〕従上座遲擬。師云、——。

聖音は「ソク」。①詰め込む、腹いっぱいにする。『広韻』に「塞ぐなり」とある。〔碧巖録七十七頌〕餠餅——来猶不住。

②俗語の「築」と同じ。突く。〔碧巖録十一本則評唱〕臨濟

於大愚脇下——三拳（臨濟録では「築三拳」）。

触件 さからう、たてつく。「触悞」とも書く。また「触犯」ともいう。「雲門広録上」——老兄、得麼。

た

多口 口数の多すぎる、おしゃべりな。「趙州録下」——作麼（いらんことを言うな）。

多子 仔細、あれこれ、ごたごたした事柄。「たす」とよむ習わし。「無——」という表現が普通。「臨濟録行録一」元來黃檗弘法無——。「碧巖録三十二頌」巨靈抬手無——。

多事 余計な事に手を出す、おせっかいな、という意。「多」は必要以上であることをいい、反対に「少」は必要以下であることを表わす。おせっかい屋を「多事漢」という。「祖堂集十四魯祖宝雲章」南泉和尚到。師便面壁而坐。南泉以手拍師背。師云、你是阿誰。泉云、普願。師云、如何。泉云、也尋常。師云、汝何——（おせっかいな奴だ）。

多知 知識過剰。「龐居士語録」居士一日去看普濟。濟見居士来、便掩却門日、——老翁、莫与相見。

打 特定の語句を目的語としてとり、種々の行為をなすことを表わす。金銀の器を作ることを「打金」「打銀」といい、舟車を作ることを「打舟」「打車」といい、魚をとることを「打魚」といい、水を汲むことを「打水」といい、めしを喰うことを「打飯」という、等々。また接頭語として用いられる。「打坐」「打睡」「打聽」「打成」の類。歐陽修「帰田録」

二参照。

打葛藤 葛藤をやらかす。「碧巖録一本則評唱」一等是——、不妨与他打破漆桶。

打之邊 之の字の書きかたは、左から右へ、また右から左へとぐるぐる筆を遶（めぐ）らせる。そのように、およそものごとをなして迂曲にわたることを「之邊を打す」という。「打」は為すとか作るという意の俗語。「大慧書下、答徐顯謨」此事不在久歷叢林、飽參知識。只貴於一言一句下、直截承當、不——兩。

打量 始末する、処理する。「碧巖録十二本則評唱」你但——得情應意想計較得失是非、一時淨尽、自然会去。

打野樵 聯灯会要二十一の余論に「如福州諺曰打打野樵者、成堆打闕也。今明招録中作「野樵。」と言ひ、続けて、のちに圓悟が碧巖録の中で「野樵は乃ち山上焼不過底の火柴頭なりとするのは誤りである」と言っている。この解釈によれば、一団になってわいわい騒ぐこと。この意味で通じる。「雲門広録中」横担拄杖、東西南北、一任——。

梁根 一つところにじっとして動かないこと。一つの境地に腰をすえる、或る一つの世界に安住定着すること。「探跟」「探根」「探跟」「墮根」とも書く。「伝灯録二十三広徳延章」纔到洪山便——、四平八面不言論。

体 心得る、飲み込む。「洞山録」若不——此意、何超始終之患。

体会 からだで会得する。「体」はまた「体認」「体得」などの

ように、本体・本質をも意味するから、そのニエアンスも籠められている。「伝灯録六馬祖道一章」僧云、忽遇其中人來時如何。師云、且教伊——大道。

体格 格式。「祖堂集九九峯道慶章」且如諸方及先德未建立如許名目、指陳已前、諸兄弟約什摩——商量。

体究 本体・本質まで極める。また、全人格を投入して打ち込むという意にも用いる（体会、体認、体察など）。「臨濟録示衆十」不是娘生下便会、還是——練磨、一朝自省。

体解 まるごと理解する。「伝灯録二十七天台豐干章」寒山子捨得、二人執爨、終日晤語、潛聽者都不——。

体悉 びたりと分かる。「雲門広録上」問、十二時中、如何——。師云、不難弁。

体取 まるごと掴む。「祖堂集五三平義忠章」各自有本分事在、何不——作什摩。

体知 明らかに知る。「最上乘論」我既——衆生仏性本来清淨、如雲底日。

体得 本質をまるごとつかみ取る。「体会」「体認」ともいう。「伝灯録十五洞山良价章」——仏向上事、方有些子語話分。

体露 まるごとさらけ出す。真実ありのまきに打ち出す。「碧巖録二十七本則」僧問雲門、樹凋葉落時如何。雲門云、——金風。

帶累 人を巻きぞえにする、めいわくをかける。「趙州録上」老僧不是戲好、恐——他古人、所以東道西説。

諦当 びたりとあたる、つばをおさえる。「祖堂集十玄沙師備

章」靈雲——甚——、敢報未徹在。

托開 つきはなす、つきとばす。「拓開」とも書く。「臨濟録勘弁十九」有定上座到參。問、如何是仏法大意。師下繩床、擒住与一掌、便——。

脱空 ホラを吹く、うそをつく。「睦州語録」得恁麼——妄語。

担板漢 板を肩にかついだ男。自分がかついでいる（かかえこんでいる）物や理念に左右されて行動する人間を罵って言う。つまりワン・パターンの教条主義者。「伝灯録十二陳尊宿章」師尋常或見衲僧來、即閉門。或見講僧、乃召云、座主。其僧

応諾。師云、——。

探頭 さぐりを入れる。覗き見する。「臨濟録上堂四」有僧出禮拜。師便喝。僧云、老和尚莫——好。

端的 そのものずばり。唐代では名詞、宋・元には副詞化した用法が現われる。「祖堂集八曹山本寂章」如何是目。師云、——去。

男女 子供、子女。「碧巖録八頌著語」這老賊、壞人家——。

断送 殺す、かたをつける、始末する。宋・元代では葬式を出す意味にも用いる。「祖堂集九九峯道慶章」問、中下者即仮——。師云、是落在曲勸。

ち

知道 単に「知る」という意。現代語も同じ。↓「道」「伝灯録十二虎谿庵主章」——今日落人便宜。

知聞 知れわたる。唐代の俗語。「雲門広録上」問、曹溪一句、

蓋国——未審雲門一句、什麼人得聞。

遲疑 咄嗟に反応できずもたもたすること。決着がつけきれない状態。〔臨濟録示衆十一〕要用使用、更莫——。

馳求 尋ねもとめる。〔臨濟録示衆十〕即今与麼——底、你還識渠麼。

築 突く、撞く。俗語。「壓」とも書く。宋代にはホッケーを「築毬」と称したが、それはボールを杖で撞いたからである。〔臨濟録行録一〕師於大愚脅下——三拳。

築著 突く、撞く。↓「著」〔伝灯録二十六古賢謹章〕僧問、如何是仏。師曰、——汝鼻孔。

著急 むきになる、ひたむきにやる。〔投子語録〕無量劫來閒処——、向自己処却閑。

著実 じつくりと、がっちり。〔龐居士語録〕士又問、就曰、馬大師——為人処、還分付吾師否。

著精彩 本気になって打ちこむ。〔著精神〕ともいう。〔雪峯語録下〕汝須——。

著賊 賊に著る。賊（したたか者）にしてやられる、一杯食わされる。〔伝灯録十九太原孚章〕汝——也。〔碧巖録二十三頌著語〕——了也不知。

著著 著の一着一着。ひと手ごとに。一つ一つの提起に。〔碧巖録八本則評唱〕千變万化、節角聲訛、——有出身之路。

著忙 いきりたつ、むきになる。〔碧巖録十五頌著語〕——作什麼。

著力 全力を尽くす、力をいれる、打ち込む。〔伝灯録十五漸

源仲興章〕師曰、正好——。石霜曰、這裏針劄不入、——什麼——。

佇思 思いなずむ、思案に暮れる。〔雲門広録上〕若約納僧門下、句裏呈機、徒勞——。

鳥道 〔祖庭事苑〕四に「虚空というに等しい」という。鳥の通い路。跟跡をとどめぬことのたとえ。〔伝灯録十五洞山良价章〕僧問、師尋常教人行——、未審如何是——。師曰、不逢一人。

趁口 ロまかせに、出まかせに。〔雲門広録上〕須到者箇田地始得。亦莫——乱問。

趁讀 人の後についてまわって、わいわいがやがややること。〔讀、順言戲弄貌〕（康熙字典）。〔伝灯録十八玄沙師備章〕

仁者、仏法因縁事大。莫作等閑相聚頭、乱說雜話、——過時。光陰難得、可惜許。

つ

槌胸 胸を槌つ。悲嘆したり無念がったりする時の動作。〔碧巖録一頌著語〕換手——、望空啓告。

て

叮嚀 くりかえし言い聞かせること、なんども念をおして云い含めること。日本語の「ていねい」の意味ではない。〔丁寧〕とも書く。〔寒山詩〕——善保護、勿令有点痕。

呈似 示す。〔似〕は動作の方向を示す助辞が熟語となつて動

詞化したもの。「拳似」などの「似」に同じ。「伝灯録二十疎山証章」投子曰、還將得劍來麼。曰、將得來。投子曰、——老僧看。

定当「承当」に同じ。しかと受けとめる。「投子語録」問、仏用工不得。師云、大有人——不得。

定動 瞳がちらりと動くこと。語頭子音を同じくする双声語で、意味は「動」に在る。「雲門広録中」師有時以拄杖打火鑪一下。大衆眼目——。

定盤星 竿秤りの目盛り。「碧巖録二本則評唱」識取鉤頭意、莫認——。

抵死 死にもの狂いで、とことんまで。文字通りには「死に抵るまで」の意。「臨濟録示衆十」学人被奪、——不放。

帝郷 首都。主人公の居所。「碧巖録九本則評唱」不知身在——。

提掇 手の上のもの載せて重さを計ること。「碧巖録三十四本則評唱」到這田地、也須是箇漢、始可——。

擲投 サイコロ。「投」は「骰」と同じ。「祖堂集十八陸亘大夫章」大夫又因拈起——、問南泉、与摩又不得、不与摩又不得。正与摩信彩去時如何。

觀機 目の当りの働きそのもの。「雲門広録上」問、如何是露地白牛。師云、——無改路。

觀体 身そのもの、身ぐるみ、まるごと。「雲門広録中」応化之身説、即是法身説、亦喚作——全真。

觀面 目のあたり。「祖堂集十五盤山宝積章」——相呈、更無

余事。

擲送 最後のしめくりをつけること、野辺送りをする事。

送死、送終。宋・元の時代には「断送」という。「祖堂集九落浦元安章」師臨遷化時云、衆中還有新來達士、出来与老僧——。

微困 「困」は疲れること。くたくたになる。「臨濟録行録二」大愚云、黄檗与麼老婆、為汝得——(汝の爲めにし得て微困なり)。

天堂 極楽のこと。「祖堂集十四百丈懷海章」亦不畏地獄縛、亦不愛——業。

点頭 うなづく。「伝灯録十七雲居道膺章」石——、亦不干自己事。

点破 問題点を摘扶する、かんどころを種明かしする。「伝灯録十二宝寿沼章」向後有多口阿師与汝——在。

転背 背を向ける。「趙州録下」問新到、從何方來。云、無方面來。師乃——。僧將坐具随師轉。師云、大好無方面。

田業 田畑。「産業」ともいう。「雪峯語録下住持規制」不許各度童行、私置——。

田地 田畑を意味する他に、身分・階級・地位・心境などの、ある種の状態・境地を指す。「雲門広録上」須到者箇——始得。

と

土地 土地神の略。「祖堂集七巖頭全豁章」恰似漆村——相似。吐舌 感じ入った時の、恐れ入った時の面持ち。「臨濟録勘弁

四師乃——。

徒「図」と通じ用いられることがある。「臨濟録行録十七」

化問、来去去作什麼。師云、祇一踏破草鞋。

塗糊塗りたくる、飾り立てて適當にこまかす。「搽糊」「搽糊」「糝糊」とも書く。「大慧書答楊教授」又承需道号、政欲

相——。可称快然居士。

奴↓ぬ

切怛くだくだしい、手がこみすぎる。「大慧書答張提刑」見

其至誠、不覺——如許。

切切弁舌を弄する。「叨叨」に同じ。「陸州語録」和尚得恁麼

——生。

当機目の当りの機、いま直面している問題の核心。「雲門広

録上」問、終日切切、不得箇入路。乞師指箇入路。師云、——有路。

当体そのもの自体、それ自体。「当体」は特に唐宋から宋代

にかけて愛用された術語で、ほぼドイツ語の *an sich* に当る。宋代の注釈家の書いた杜甫の詩の注(九家注)にも

見られる。類語として敵体・剋体・微体・全体などがある。「(入矢義高『伝心法要・宛陵録』十一頁)。宗密の教相判釈にもこれらの語は愛用されている。「伝心法要二」——便是、

動念即乖。

当人ほんにん。「祖堂集十四樂黃希運章」——事不能會得、

但知念言語、学向皮袋裏。

当陽文字どおりには「南面して」ということで、まっこうか

ら、明々白々に、まともに、などの意に用いられる。外典ではその意に用いられることはない。「伝灯録八齊峯章」莫是

——道塵。

当来将来。「伝灯録十七雲居道膺章」僧曰、弥勒什麼時下生。

曰、見在天宮、——下生。

投機二人が互いに意気投合することをいうのが原義で、そこ

から転じて、真理の秘奥に参入し、道と一つに契合する体験

を得ることをもいう。「祖堂集十三報慈光雲章」不弁——則

向賓主分上行。

投明夜明けに間に合う。「祖堂集六投子大同章」不許夜行、

——須到。

抖擻ふるいおこす、ふるいたたせる。発奮することを「抖擻

精神」という。「祖堂集十安国弘毅章」何不——眉毛、著物

子精彩耶。

透脱突きぬける、突破する。「臨濟録示衆十」不与物拘、——自在。

一自在。

答話答える。「問話(質問する)」に対する。「趙州録中」請

和尚——。

等閑(閑)なおざりに、いいかげんに。またこの意味の動詞。

時には、悠々閑々と、のほほんと、という意にも用いられる。

「祖堂集七雪峯義存章」莫将——。「宛陵録七」——無事、莫

謾用心。

掃塵しょぼくれて汚えないさま。「碧巖録一頌著語」——阿

勞。

闕喏　口でつつきまわす。〔雲門広録上〕 便似屎上青蠅相似、

——將去、三箇五箇、聚頭商量。

同行　修行仲間。〔碧巖錄十八本則評唱〕 山南府青銓山和尚、

昔与国師——。

同火　仲間、同僚。〔同伙〕〔同夥〕とも書く。〔碧巖錄二十二

頌著語〕須是——始得。

道眼　仏法の真実を見る眼。法眼。〔臨濟録示衆十八〕——分

明、始識得天下老和尚、知其邪正。

道却　言ってしまう。〔祖堂集十鏡清道愆章〕 問、明能相見、

其理如何。師云、可惜与汝——。

道取　言つてのける。〔龐居士語録〕 霞一日問居士…土曰、更

——一句、便得此話円。

道著　言いてる、言いつける。〔雲門広録中〕 仏法両字、未曾

——。——即撒屎撒尿。

道得　言いつ留める、過不足なく表現する。「わが道元禪師が強

調する「道得」は、本當の悟りは、その悟りの当体が同時に

言葉に定着できるということではなくてはならぬ、という趣

旨〕〔入矢義高「龐居士語録」七三頁〕。〔雲門広録上〕 上堂、

良久云、還有人——麼。——底出来。衆無語。

道人　本色の修行者。〔伝心法要十四〕 ——は無事人、実無許

多般心、亦無道理可説。

道破　ズバリと言いつ当てる。〔伝灯録二十広利容章〕 問、如何

是和尚家风。師曰、謝闍黎——。

道理　りくつ、わけ、子細。〔道人〕の用例を見よ。

得人怕　「こわい」という意。類語として「得人憎」〔にくた

らしい〕がある〔入矢義高「龐居士語録」二〇〇頁〕。〔龐居

士語録〕吾師——。

得便　付け入る、機会に乗じる。〔臨濟録示衆八〕 如菩薩疑時、

生死魔——。

得力　①人のおかげを蒙る。そのおかげを蒙る相手を挿入して

「得…力」という場合もある。〔龐居士語録〕 靈問曰、昔日

居士南嶽——句、還曾拳向人也無。②力がつく、力量を身に

つける。〔大慧書答宗直閣〕 日用四威儀中、涉差別境界、覺

得省力時、便是——処也。

咄　叱咤する叫び。「トッ」と叫ぶわけではない。〔祖堂集四

葉山維儼章〕 ——、這多口阿師。

鈍置　コケにする。「鈍致」とも書く。〔祖庭事苑〕 一に「礙不

行也」と解説するのは誤り。〔雲門広録上〕 上堂云、去去、

遞相——、有什麼了時。

な

喃喃　本を読む声の形容。また人のしゃべり声や、鳥のさえず

りの形容。〔伝灯録十九雲門文偃章〕 到处火炉辺、三箇五箇

聚頭、口——挙。

に

日頭　俗語で太陽のこと。お日さま、おてんとさま。↓「」

頭〕〔伝灯録十二魯祖教章〕 半夜——明、日午打三更。

入処 悟入への手がかり。〔伝心法要三〕学道人唯認見聞覺知、施為動作、空却見聞覺知、即心路絶、無——。

入頭 悟入への手がかり。〔雲門広録中〕一日云、入夏来十一日也。還得——麼。

入路 悟入への手がかり。〔雲門広録上〕問、乞師指箇——。師云、喫粥喫飯。

如法 仏法になつた在りようであること。また一般的に、実直・まじめであることをいう。〔臨濟録示衆十四〕你欲得——、但莫生疑。

人家 ひとさま、ひとさまの。「家」は意味のない接尾語。〔雲門広録上〕這箇語話誑諱——男女。

人定 人が寝しずまる。次の例では亥の刻であるが、深夜にいてもいい。〔伝灯録二十九詰公十二時頌〕——亥、勇猛精進成懈怠。

人惑 他人からの誤つた影響。〔臨濟録示衆一〕如山僧指示人处、祇要你不受——。

認著 認容する。〔臨濟録示衆六〕你真——箇夢幻伴子。遲晚中間、便帰無常。

認得 見知る、認知する。〔趙州録中〕問、離四句、絶百非時如何。師云、老僧不——死。

ぬ

奴郎 「奴」は奴隸、「郎」は郎主つまり主人をいう。本末是非をわきまえないことを「奴郎不弁」といい、とりちがえるこ

とを「認奴作郎」という。〔祖堂集十鏡清道愆章〕如何是我今不是渠。師云、識弁——始得。

ね

捏怪 物の怪に憑かれて奇怪な言動をする。〔伝灯録二十八羅漢桂琛語〕莫向意根下——。

捏目 目をこずること。物をもつとよく見ようとする時のしぐさ。〔円覚経略疏卷上之二〕——望月輪、月辺別現月。

熱大 大変な事、ゆゆしい事。〔大慧年譜〕有偈与無偈、是甚麼——。

熱鬧 わいわいやる、賑やかす。また形容詞にも用いる。〔碧巖録十一本則評唱〕不可只図——也。

拈起 指先でつまみ上げること。〔伝灯録十八竜冊道愆章〕新到僧參。師——拈子。

拈却 つまんで取り去る、取り除く。〔雲門広録中〕仏法——、我不問你。還有識世諦法麼。

拈撮 ものを手の平にのせていらう。とりあげる。話題にする。〔雲門広録上〕和尚作麼生下手——。

拈弄 もてあそぶ、いじる、ひねくる。禅では古則や公案を取り上げて弁じ立てる意味に用いる。〔碧巖録二十二頌評唱〕従上来有多少人——。

の

衲子 のつす。禅僧をいう。〔碧巖録五本則評唱〕若是箇本色

行脚——見他恁麼已是郎当為人了也。

衲僧 禪僧をいう。「雲門広録下」作麼生是——行脚事。

は

巴鼻 手がかり、とらえどころ。「雲門広録中」衲僧須得——即識得天下人。

把住 ひっ掴まえる。「臨濟録上堂三」有僧出問、如何是無位

真人。師下禪牀、——云、道道。

把得 つかむ。「臨濟録示衆三」——使用、更不著名字、号之為玄旨。

波斯 ペルシアの表音。波斯国は今のイラン。禪録では一般に西来の外国人を指す。「祖堂集十一黃竜譚機章」問、如何是西来意。師曰、——人失手巾。

波波 あたふた。「波波地」ともいう。「伝灯録十五夾山善会章」上根人言下明道、中下根器——浪走。

破題 主題を説き起す、話しはじめる、先鞭をつける。「祖堂集五華亭徳誠章」主人推不得、便昇座——兩三則言語。榘柄 かなめ、急所。「把柄」とも書く。また「巴鼻」と同義に用いることもある。「大慈書答曾侍郎第五書」公已捉着——矣。

背杖 背負う。「杖背」ともいう。「祖堂集九韶山寶普章」汝若

横吞巨海、我則——須弥。

排遣 あしらう。「伝灯録十九雲門文偃章」問、生死到来、如何——。師展手曰、還我生死来。

排批 順序だててならべること。「批排」ともいう。「祖堂集十七普化章」——飢食、对坐食。

敗闕 負ける、遅れをとる。「臨濟録行録十二」這老漢今日——也。

拍盲 そこひ。「雲門広録上」問、大——底人来、師還接也無。師放身倒。

薄舌 べらべらしゃべりまくる。「伝灯録二十八南泉普願語」

阿你尋常巧譬——、及乎問著、總皆不道。

八成 八割、つまり二割不足。「碧巖録八十九本則」道即太煞道、只道得——。

撓無 無視する。「祖堂集九羅山道閑章」軫云、大師因什麼——軫話。

拔本 無著道忠は言う「商賈の語を用う。落節は利を失するなり。拔本は財本を拔得するなり」と（葛藤語箋第三）。元も子もなくすこと。「碧巖録四本則著語」東辺落節、西辺——。

返照 夕日の照り返しをいうのが普通であるが、禪では自己に内在する本然の光を外へ輝き出させる意に用いる。「臨濟録示衆一」你祇有一箇父母、更求何物。你自——看。

万福 ご機嫌いかがですか。挨拶用語。宋代以后は女性のみが用いる。「祖堂集四葉山維嚴章」沙弥問、老人——。老人曰、

法公——。

伴子 つれ。多く五蘊（肉体）を指す。「臨濟録示衆六」你真認著箇夢幻——。遅晚中間、便帰無常。

ひ

皮袋 身体をいう。「臭皮袋」ともいう。「雲門広録上」合取一。

批評 順序よく排列すること。「祖堂集五道吾円智章」師曰、如法——茶鉢、明日我与你酌。

被搭（マントや羽織りなどを）はおる。また、馬や驢馬の背に荷をつけることもいう。「趙州録上」問、在塵為諸聖說法、總屬——。未審和尚如何示人。

非次「次」とは一般の順序次第。それを乱すことを「非次」という。「祖堂集十三福先省澄章」問、不噴——、如何是和尚家風。

被蓋 かけぶとん。「伝灯録十七曹山本寂章」問、親近什摩道伴、即得常聞於未聞。師總、同共——。

費力 骨折り損のことをやる、無駄な努力をする、ご苦労さんなことをやる。「費心力」に同じ。「省力」（省心力）の反対。

「趙州録上」問、学人擬作仏時如何。師云、太煞——生。云、不——時如何。師云、与麼即作仏去也。

尾巴 しっぽ。「洞山録」徳山為頭作主、幸好機籌、忽被洞山指蹤、不覺——露出。

鼻孔 鼻。人間の顔をして顔たらしめるもの。本来の面目。「碧巖録三十二本則著語」未免失却——。

ふ

不安 病氣をいう。「投子語録」師——時、有李司徒、令人送藥到。

不易 大変だね、という見舞いの言葉。「祖堂集六洞山良价章」

師問病僧、——、闍梨。対曰、生死事大、和尚。

不啣 咬えない、だらしがない、しゃんとしない。「雲門広録下」因普請般米了、坐次云、近日——、祇担得一斗米。不如快脱去。

不審「僧史略」上に言う「比丘の相見するが如き、躬を曲げ合掌して口に不審と云うは何ぞ。此れ三業もて帰仰するなり」と。挨拶の言葉であると同時に挨拶することをも意味する。「祖堂集十二竜廻從盛章」度上座夜間拳似諸禪客次、師近前來云、——。

不著便 ツイてない。「祖堂集七巖頭全豁章」今生——。

不中 役に立たない、間に合わない。「碧巖録十九本則評唱」

美食——飽人喫。

不憤 憤怒のきわめてはなはだしいのをいう。「不忿」とも書く。「碧巖録七本則評唱」法眼云、監院果然錯會了也。則——便起單渡江去。

布衲 麻の衲衣。「布衲」とも書く。「伝灯録十八玄沙師備章」——芒屨、食糲接氣。

負墜 議論において破綻を来して敗北すること。↓「話墜」

「碧巖録十三本則評唱」西天論議、勝者手執赤幡——者返

披袈裟、從偏門出入。

無事 ①なすべきこととは何もない。また、人為の入りこみようもない平穩静謐な世界のありよう。〔雲門広録上〕師云、我事不獲已、向你諸人道、直下——、早是相埋没也。②「さあ、もう用はない」。上堂説法のしめくくりという言葉。〔伝心法要十四〕——、散去。③よせば良いのに。わざわざ。〔龐居士詩下〕——失却心、走向門前覓。

無事人 もはやなすべき事が何もない人。〔臨濟録示衆九〕仏与祖師是——。

風顛漢 きちがい。また、常識の枠を破り超えた人物をもう。その意味で、狂狷、不羈、放誕な行動者を讃えている場合も多い。〔臨濟録行録四〕和尚爭容得這——無礼。

分疏（疎） 言い分けをする、釈明する、決着をつける。〔趙州録上〕問、至道無難、唯嫌揀揆、是時人冥窟。師云、曾有問我、直得五年、——不得。

分付 与える、手渡す。また「吩咐」とも書いて、言いつける、命令する、という意にも用いる。〔祖堂集二慧能章〕行者遙見明上座、便知來奪我衣鉢、則云、和尚——衣鉢某甲、苦辭不受、再三伝持、不可不受。

へ

平穩 たしかさ、ゆるぎなさ。〔おだやか〕という意ではない。

〔碧巖録二頌評唱〕畢竟怎生得——去。

平懷 おさまり返った見解。こむりこもつともな平穩無事の心

境。〔信心銘〕一種——、泯然自尽。

平欺 あなどる、馬鹿にする。〔祖堂集七雪峯義存章〕事不得已、向汝与摩道、已是——汝了也。

平交 互角の勝負、あいこ、対等。〔龐居士語録〕峰一日与居士並行次：峰笑曰、是我拙、是公巧。士乃撫掌曰、——、——。

平実 ごもつともな、可もなく不可もない。〔碧巖録六頌著語〕墮在——処。

平出 あいこ、あい打ち。〔伝灯録一富那夜奢章〕与師——。

平人 無辜の民、良民。〔碧巖録二十二頌著語〕帶累——。

平生 ふだん、日常。日頃の在り方、努力。〔雲門広録上〕不虛辜負——、亦不辜負施主師長父母。

平展 平常に呈示する。からくりなしに、おとなしく立ち現われる。〔碧巖録二十二本則評唱〕你若——、一任——。你若打破、一任打破。

平白 理由もなく、わけもなく。〔平白地〕ともいう。〔碧巖録二十二本則評唱〕元無一星事、——地上説這般話疑人。

平鋪 なんのしさいもない、普通の。〔碧巖録六本則評唱〕到——処、又卻罵人。

併却 遮断する、ふさいでしまう。〔伝灯録六百丈懷海章〕師上堂云、——咽喉唇吻、速道将来。

併当 かたづける、始末する、処分する、かたをつけてしまう。〔拈当〕「屏当」「摒擋」などとも書く。〔祖堂集九落浦元安章〕仮饒——得門頭淨潔、自己未得通明、還同不了。

劈頭 頭めがけて真正面から、頭から。〔碧巖錄一本則評唱〕達磨——与他一拶。

劈面 まっこうから、まともに。〔辯面〕とも書く。〔碧巖錄九頌〕句裏呈機——来、爍迦羅眼絶纖埃。

辺表 微標、すじめ、目じるしとなるもの。〔祖堂集六洞山良价章〕如何是虚空之理。師曰、蕩蕩無——。

匾担 天秤棒のこと。への字に結んだ口に喩える。〔伝灯録十八長慶懸稜章〕大小長慶被汝一問、口似——。

貶剥 非難する、こきおろす。〔臨濟錄上堂六〕一任天下人——。

辦得 正体・真実を見て取る。〔臨濟錄示衆七〕若能如是——、不被境転。

ほ

母親 ははおや。〔祖堂集二慧能章〕父早亡、——在孤、艱辛貧乏。〔睦州語録〕織蒲鞋藕、養——。

方頭 石あたま、融通きかず。〔祖堂集九九峯道虔章〕文殊是——。

放過 それでよいとしてほっておく、自由にやらせておく。〔過〕は行為の完了を表わす。〔過〕ではない。〔祖堂集五雲岳曇晟章〕泊錯——這個漢。

放憨 おろかさぶりを見せる。〔放癡〕ともいう。〔放頑〕とも書く。〔玄沙語録中〕長慶来。師問、除却癡忌、作麼生道。

慶曰、——作麼。

放下 単に「置く」「下ろす」ということ。ほうり投げることではない。〔放下著〕という場合の「著」は命令を表わす。

〔祖堂集十四杉山智堅章〕師便把火筋——。

保任 百パーセント責任をもつ。〔祖堂集八曹山本寂章〕問、大——底人失一念如何。師云、始得——。

縫 ひび、裂け目。〔縫い目〕ではない。〔無縫塔〕とはひびや割れ目一つない石塔のこと。〔伝灯録二十七寒山章〕二士

高声喝之、便縮身入巖石——中。

卜度 当て推量する。〔雲門広録上〕莫見与麼道、便向不円不頓處——。

撲 身が投げ出されること。ほおり投げられること。つまずいて倒れる場合や、高い所からはおり出される場合という。文語の「撲つ」とは別。〔趙州録中〕師云、三十年弄馬騎、被驢子——。

勅塑 唐突、ぶしつけ。〔教素〕「教誨」とも書く。〔伝灯録九潯山靈祐章〕正恁麼時、切忌——。

躡跳 蛙や蝦がびんびんはねること。〔睦州語録〕蝦蟇——上天、蚯蚓驚過東海。

本色 粉飾を絶って生地まる出しの、ほんものの、という意。〔祖堂集十八趙州從諗章〕師云、自住已来、未曾遇著一个——禪師。

本分 本来のもちまえ。禪録においては、本来人としての在り方、自己の本来性への自覚に根ざした生き方、という重い意味を荷っている。〔祖堂集九靈巖慧宗章〕僧問、如何是学人

本分

自己——事。師云、抛却真金、捨得瓦礫、作什摩。

奔波 あたふたと駆け廻る。〔臨濟録示衆十四〕光陰不可空過、腹熱心忙、——訪道。

ま

埋没 コケにする、わやにする。〔雲門広録上〕師云、我事不獲已、向你諸人道直下無事、早是相——也。

弄弄 ひけらかす。〔碧巖録四十九頌著語〕——出来、不妨驚群。

驚口 口めがけてまっこうに。〔伝灯録十六雪峯義存章〕師以

私子——打。

驚頭 頭めがけてまっこうから。〔伝灯録十二陳尊宿章〕師脱

草履——打。

驚鼻 鼻づらひつつかんで。〔趙州録上〕師便近前、——便拽。

驚面 顔めがけてまっこうから、むきつけに。〔趙州録中〕問、

学人遠来、請和尚指示。師云、纔入門、便好——唾。

顛預 愚図でぼんやりしていること。ぼさっとしていること。

〔碧巖録三十九本則評唱〕若不知、未免——。〔同二十一本則評唱〕——仏性、備侗真如。（これは他動詞としての用法。）

み

未隱在 落ち着かない、しっくりしない。〔在〕は強調の語。

〔碧巖録二十二本則評唱〕自点胸云、某甲裏道——、不敢自瞞。

む

無常 死ぬ。また、死。〔高僧伝三智猛伝〕至波淪国、同侶竺

道嵩又復——。将欲闍毗、忽失屍所在。〔祖堂集十九香嚴智

閑章〕大徳、莫待頭白齒黄、耳聾眼暗。——到来、悔当何及。

無是処 駄目だ。そういう道理はない。そういうことは成立し

ない。〔無有是処〕ともいう。〔祖堂集九羅山道閑章〕驢年終

——。

無分 資格なし。〔祖堂集八雲居道膺章〕自是你——。

無方 無限定、無際限。〔臨濟録序〕妙応——、不留踪跡。

め

名邈 物や人に名称をつけ形象化すること、名を付け形を与え

ること。〔投子語録〕問、如何是祖仏未經歷処。師云、——

不得。

明朝 明日。〔伝灯録十八玄沙師備章〕如今若不了、——後日、

看変入驢胎馬肚裏、牽犁拽把。

明白 あれかこれか区別のはっきりしていること。〔碧巖録二

本則〕纔有語言、是探扱、是明白。

迷 見失う。〔祖堂集七夾山善会章〕清潭之水、游魚自——

（自分の居る位置が解らない、決まらない、はっきりしない。

方角を見失う）。

面孔 顔のこと。俗語。〔投子語録〕問、僧繇為什麼邈志真不

得。師云、只為看他——。

面門 顔のこと。また眉間をいうこともある。〔傳大士心王銘〕

心王亦爾、身内居停。——出入、応物随情。

も

摸索 さぐりあてる、糸口をつかむ。〔摸索〕とも書く。〔碧巖

録九本則評唱〕且道、作麼生——。

慳慳 恥じること。〔碧巖録二十八本則評唱〕看這老漢一場——。

妄自 みだりに、思慮分別もなく。〔玄沙語録上〕今時人不悟

箇中道理、——涉事涉塵。

罔措 何がなんだか解らないで、自分自身をどう据えていいか、

手足の置きどころのないさま。〔祖堂集十安国弘贍章〕如何

是正令。師良久。学人——。

臆腫 ぼんやりした、愚鈍な。〔趙州録中〕者——漢、什麼処

去来。

木轍 丸太棒。〔臨濟録勘弁九〕師打露柱云、直饒道得、也祇

是箇——。

木頭 木。〔〴〵頭〕〔大慧語録十四〕天是天、地是地。露柱是——、

金剛是泥塑。

木楔 棒きれ、丸太棒。〔木突〕とも書く。〔雲門広録中〕有一

人問著、口似——、有一人問著、口似懸河。

没可把 とらえようがない、手がかりがつかめない。〔大慧書

答曾侍郎第二書〕当人脚跟下、淨保傑、赤灑灑、——、豈

不快哉。

没交涉 勘どころと関係がなくなってしまう。〔勿交涉〕とも

書く。〔臨濟録示衆十〕学人若眼目定動、即——。

没頭 頭までずっぽりと。〔雲門広録中〕水裏——浸渇死漢。

没量 はかりようのない、基準を当てはめようのない。〔勿量〕

とも書く。〔玄沙語録中〕雲門曰、——大人、被語脈裡転却。

紋綵 それと見て取られる徴表（しるし）、サイン、痕跡。未

だ振つ切れていないシッポ。〔文彩〕とも書く。〔祖堂集四葉

山惟嚴章〕問白顔、日勢何似。対曰、正当午時。師曰、猶有

——在。

問過 たずねる、問いつめる、調べあげる。〔碧巖録四十一頌

著語〕遇著試与一鑑、又且何妨、也要——。

問取 掛け合う、談判する。〔祖堂集八雲居道膺章〕問、不仮

言句、還達本源也無。師云、——与摩人。

問訊 初対面のあいさつをする。最も早い例は陶淵明の「桃花

源記〕に見える。〔打問訊〕ともいう。〔祖堂集三慧忠章〕肅

宗皇帝——次、師不視帝。

問端 問いの端緒、問題点。〔碧巖録二十九頌〕劫火光中立——、

納僧猶滯兩重関。

問著 問い詰める。〔臨濟録示衆十〕被他——仏法、便即杜口

無詞。

問当 問いつめる。〔当〕は接尾語で「併当」の「当」に同じ。

〔祖堂集十五盤山宝積章〕吾師既問不伝事、——何愁不為通。

問頭 問い。〔〴〵頭〕〔祖堂集十九資福真遂章〕問、室内呈

喪時如何。師云、好个——。

問話 質問。質問する。「答話」に対する。「伝灯録十二臨濟義玄章」初在黄檗、随衆参侍。時堂中第一座勉令——。

聞説 聞く。「伝灯録十九保福從展章」——和尚不解忌口。

聞道 聞く。「道」を見よ。「祖堂集十安国弘道章」豈不——、諸仏理論、不干文字。

や

夜行 夜歩き。夜間に道を行くことは、旧中国では厳禁されていた。その「夜禁」を犯して通行すること。「伝灯録十五投子大同章」趙州問、死中得活時如何。師曰、不許——、投明須到。

爺 とつとあん。「伝灯録十六感潭資国章」死却——、死却嬢。

爺嬢 父と母。「爺嬢」とも書く。「祖堂集三慧忠章」其兒子便入草隱遁、廻避——便行。

厄屈 めれぎぬを着せる、罪のないものを罪におとしいる。

「祖堂集九南際僧一章」問、学人幸獲得親、乞師指示。師云、我若指旨、則——著你。

薬忌 取り合わせて服用してはならぬ薬のこと。食あたりを起す薬のことではない。「伝灯録十八玄沙師備章」長慶秘来。

師問、除却——、作麼生道。後曰、放憨作麼。

薬病 病を癒す薬、また薬を必要とする病。相手があつての条件のもとで成立する関係。「臨濟録示衆十三」名言章句、接引小兒、施設——、表顯名句。

ゆ

由来 もともと。「伝灯録三十懶瓚和尚歌」多言復多語、——反相誤。

輪却 勝負事に負けることを「輪」という。「伝灯録九鴻山鑑祐章」百丈笑云、第一座——山子也。

よ

用処 はたらき、活動、効果。「臨濟録示衆二」道流、約山僧見処、与釈迦不別。今日多般——欠少什麼。

用心 心力を費す。思念をめぐらす、思案する。「臨濟録示衆十四」大徳、莫錯——。

拗折 「拗」はへし折る意。「伝灯録二十五百丈道常章」——拄杖、得也未。

様子 ひながた、手本。「碧巖録八本則評唱」此乃下句底——。養 生むこと。「寒山詩」——女畏太多、已生須訓誘。「臨濟録勘弁二」——子方知父慈。

ら

羅籠 思いどおりに制御する、好きなようにとり込む。大商人が値段を好きなように操作する場合などに用いる。「羅籠」とも書く。「祖堂集九羅山道閑章」天下横行、——自在。

来機 相手の出かた。こちらに向けての相手のはたらきかけ。その相手の力量。「祖堂集十八仰山慧寂章」亦如人将百種貨

物、雜渾金宝、一鋪貨売、祇擬輕重——。

来由 端緒、きっかけ、いわれ、わけ。〔祖堂集十長慶慧稜章〕
遠則十年、中則七年、近則三年、必有——。

来来 さあさあ。促すときの掛け声。〔睦州語録〕——、還我
徑截一路来。

落機 相手を制しようとする己れの機用が却って当人の足を
すくう結果になること（八矢義高『龐居士語録』一一九頁）。

〔龐居士語録〕居士一日与松山行次・山曰、大衆放你——処。
落空 むなしい結果におわる。また「沈空」ともいい、空見に
落ちこんでしまうことをもいう（伝心法要）。

〔伝灯録十四丹
霞天然章〕不用経求——去。〔伝心法要二〕趨者不敢入此法、
恐——無棲泊処。

落在 落ちつく、落ち込む。〔臨濟録示衆五〕——因果、未免
三界生死。〔碧巖録二頌評唱〕且道、意——什麼処。

落処 つば。かんどころ。落着する究極のポイント。〔碧巖録
二十九本則評唱〕這僧元来不知話頭——。

落節 しくじる。↓「拔本」〔碧岩録四本則著語〕東辺——、
西辺拔本。

落草 おちぶれること、山賊の仲間になること。無著道忠は言
う「向上の地より下りて低下の草裡に落ちて人を接するなり。

人の草裡に在るが故に我も亦た草裡に落ちて（落草裡）之
を接するなり」と（葛藤語箋第四）。〔雲門広録中〕師一日

云、古来老宿皆為慈悲之故、有——之談、隨語識人。
乱統 おおまか、なおざり、いいかげん。〔雪峯語録上〕不可

——即便休去。

り

理会 かまいつける、とりあう。〔大慧書答汪内翰第二書〕過

去底事、或善或惡、或逆或順、都莫——。

理論 あげつらう、りくつをつける、論定する。〔祖堂集十三
福先招慶章〕漕溪門下子孫、合作摩生——、合作摩生提唱。

掠虚 うわつたらをかいなでする、うわすべりする。〔略虚〕
とも書く。また「掠虚頭」ともいう。〔伝灯録十九雲門文偃

章〕若未切、不得——。
了却 かたをつける、こなしてしまふ。〔祖堂集十九香嚴智閑

章〕師為衆曰、此世界日月短促、則須急急底——去。
了期 けりのつく時。〔碧巖録五頌評唱〕只管作計較道理、有

什麼——。
了事 ①なすべきことにちゃんとカタをつけること。〔龐居士

語録〕不是賢聖、——凡夫。②腕が立つ、有能な、の意。
〔歴代法宝記〕差——臬官、就山同請。

了日 けりのつく日。〔了期〕ともいう。〔臨濟録上堂二〕少信
根人、終無——。

了手 しめくくり、結び。〔祖堂集雲門文偃章十二時偈〕黄葉
浮漚賺殺人、命尽憐憫是——。

兩頭 二つの面、両面。〔祖堂集十八趙州全諍章〕長慶云、若
向——会、尽不見趙州意。

領過 処断する。〔雲門広録中〕某甲若道有、被和尚——。

領話 話がわかる。「[祖堂集七雪峯義存章] 謝和尚——。

る

屢生 ばかもの、おろかもの。「[臨濟録示衆二] 瞎——、索飯

錢有日在。「[投子語録] 師云、鈍——。

累害 余弊、後遺症。「[祖堂集五雲巖曇晟章] 報慈拈問、——
在什麼處。

冷地 ひっそりした所、表だたない所。「[碧巖錄三十二本則著
語]——裡有人觀破。

玲瓏 ぐつたり、げんなりした状態。「[伶俦]と同じ。「[雲門広
錄上] 問、——之子、如何進步。師云、目前不弁。

靈台 心のことをいう。「[祖堂集七雪峯義存章] 妄情索引何年
了、辜負——一点光。

靈利 気のきく、すばやく手ぎわのよい。「[伝灯録八南泉普願
章] 我往前住庵時、有箇——道者、直至如今不見。

曆日 こよみ。カレンダー。「[碧巖錄六本則著語] 這裏不収旧
——。

歷劫 甲羅を経る。また、久しい時間を経ること。「[雪峯語録
上] 若受持一字、——野狐精。

歷落 『世説新語] 容止第十四「周伯仁道、桓茂倫欬奇——、
可笑人。注、——猶磊落也。」「[投子語録] 問、請師——道一

句「[伝灯録は「問、——一句請師道」。師云、好。
裂転「裂」は「振」に同じ。ねじまげること。「[睦州語録] 問、

如何是仏。師云、——鼻孔。

連忙 あわてふためく。「[碧巖錄三十二本則評唱] 定擒住、擬

拋向橋下。時二座主——救云、休休。

る

齒弄 がさつ。おおまか。「[碧巖錄三十九本則著語] 問處不真、
答来——。

老漢 老和尚を親しみをこめて呼ぶ時や、のしる時に用いる。
また謙称にも用いる。「[祖堂集七偈頭全豁章] 師平生預有一

言、者——去時、大吼一声了去。

老胡 釈迦あるいは達磨を指す。「[祖堂集十二竜光隱微章] 這
个事、古今排不到、——吐不出。

老師 禪匠。「[臨濟録示衆五] 道流、莫取次被諸方——印破面
門、道我解禪解道。

老宿 年長で徳望の高い僧。長老、尊宿などというに同じ。
「[伝灯録二十七] 雲門曰、江西一隊——、寐語住也無。

老鼠 単に「ねずみ」をいう。老は「老虎」の老と同じく接頭
語。「[睦州語録] 將為是箇師子兒、元来是箇——兒。

老僧 禪匠の自称。「[伝灯録十二陳尊宿章] 若得箇入頭、已後
不得孤負——。

老倒 『祖庭事苑] 六によれば、老倒は「潦倒」とすべきであ
るといふ。潦倒は頽落してだらしないさま。「[碧巖錄二十

四頌評唱] ——疎慵無事日、閑眠高臥對青山。
老婆 「老婆心切」の略。「[臨濟録行録一] 大愚云、黄蘗与麼——

、為汝得徹困。

郎主 奴隷に対する主人。〔臨濟録示衆十〕你即認他無明為一

郎当

だらしないさま。〔碧巖録三十一本則評唱〕南泉貳煞

狼藉

めちゃくちゃ。無秩序。〔雲門巖録上〕向諸人前、一場

囉囉

したたかな、わるがしこい。よい意味にも悪い意味にも

用いる。〔裴羅〕「樓羅」とも書く。そういうしたたか者を

「一漢」とか「一兒」という。宋以後では盜賊の徒党を

こいう。〔南泉語要〕如今知解不是——漢、此物不是凡聖、

不是愚智、強喚作愚智。

漏逗 大事なものが抜けおちている、すかたん。〔碧巖録三本

則著語〕這漢——不少。

撈撈 おしゃべり、饒舌。〔碧巖録八頌〕——翠巖、分明是賊。

撈摸 取り付く、手がかりを探す。〔伝心法要五〕人不敢忘心、

恐落空無——処、不知空本無空、唯一真法界耳。

撈漚 探り当てようとする。〔撈漚〕「漚漚」とも書く。もとは、

水中に沈んだものをすくうこと。〔伝灯録二十八汾州無業語〕

有益者百千人中、——一箇半箇、堪為法器。

潦倒 落ちぶれる、時代おくれになる。〔碧巖録八頌〕——保

福、抑揚難得。

儼侗 ぼんやり、もっさり、のほほん。〔雪峯語録下〕冬瓜長

——、葫蘆剔突。〔碧巖録二十一本則評唱〕顚頂仏性、一

真如(これは他動詞としての用法)。

籠罩 つつみこむ、とりこむ。枠にはめこむ。〔趙州録上〕問、

如何是出三界底人。師云、——不得。

籠鐘 よたよたもたもたするさま。〔籠鐘〕「傀儡」「籠鐘」「籠

種」なども書く。〔雪峯語録下〕一十出家未是時、二十出

家正是時、今遇官壇緣來合、——且作老沙弥。

わ

話 對話全体、またはある人が問題提起した言葉を目指す。

〔伝灯録九汾州山靈祐章〕師忽問仰山、汝春間有一未円、今試

道看。

話会 話の筋を追って理解する。〔碧巖録十二本則評唱〕人多

作——道。

話似 話す。「舉似や」「説似」と同じ例。〔祖堂集十一保福從展

章〕委曲——人即得。

話主 問題の最初の提出者。〔伝灯録十八長慶慧稜章〕若舉得、

許汝作——。

話墮 人とのやりとりにおいて、自分の述べた言葉自体が破綻

を露呈すること。〔趙州録上〕你——也。

話度 話しをする。語る。〔臨濟録示衆十二〕山僧今時事不獲

已、——説出許多不才淨。

話頭 話のいとぐち、話題。また問題点。禪録においてはとく

に古則公案を指すことがある。〔祖堂集十一雲門文偃章〕還

我——來。〔大慧書答富樫密第一書〕只就按下処、看箇——。

話破 ボロを出す、破綻を見せる。〔睦州語録〕僧云、某甲什

麼処是——処。師便棒。

話路 言葉。〔雲門広録上〕枉学多聞、記持——。

話論 言論に同じ。はなす、かたる。〔祖堂集十二禾山無殷章〕

問、無影之言、如何——。師云、満口吐尽、已具知聞。